

姫騎士  
ヴァイオレットエビル  
満月の夜



小説 山本沙姫

挿絵 池田靖宏

立ち読み版

第一章 神速の剣士、参上

第二章 魔性の姫、来訪

第三章 豪腕の王子、激突

第四章 囚われの戦姫、拷問

第五章 さまよいの性奴、禁句

006

027

057

104

177

## 登場人物紹介

Characters



### サリー＝バウザー

ナベモ聖兎国の女王。城に幽閉されながらも密かに抜け出し、国民のために戦う謎の剣士『ヴァイオレットラビィ』を名乗る。

### クーヤ＝バウザー

サリーの双子の弟である王子。姉とともに王城に閉じこめられている華奢な美少年。

### ボルガ＝バックマン

アイゼン狼神国の第一王子。ナベモを侵略し、サリーたち姉弟を城に幽閉している。髭面の大男。

### アリス＝バックマン

ボルガの末妹。幼い外見に似合わずサディスティックな嗜好の持ち主。兄のボルガから異常なまでの寵愛を受けている。

ただ肉感的なボディをくねらせて、扇情的な姿を晒すばかりだ。

カーンカーンカーン！

馬のすぐ後ろには、手にした小さな半鐘を打ち鳴らしながらガスバルが続く。鐘の音は狼耳族が定めた罪人の公開処刑の合図で、この音が流れてきたら、誰もが処刑場に集まらねばならない。

鐘の音が近づいてくると、どの家も木戸を微かに開けて、一行の様子を窺う。

「バイオレットラビィが、捕まった……」

「あの人が、私を助けてくれたあの人が……」

多くの人々を救ってきた英雄が、処刑のため連行されていく姿は、守られてきた兎耳を持つ者たちに深い悲しみと絶望をもたらした。

死地への旅路にあつてなおV字に開き、頭上で揺れるラビィの鋭い兎耳にも、見送る者たちの微かな嘆きの声が聞こえてくる。

(みんなを残して……死ねない……絶対に逃げて……まだまだ戦わな……きゃ)

命の危機に晒されていながらも、民のことを案ずる心優しき姫。だが、その思いは徐々に打ち砕かれ始めていた。股間に突き刺さる、凶悪な異物によって。

いつ終わるかもわからぬ旅は、まだ始まったばかりだ。

一行は、表通りから細い路地裏まで、町中を隈なく歩き回っていく。その間ずっと秘裂に挟み込まれた木馬は、脳天まで突き抜けそうなほどにラビィを激しく突き上げ続ける。

しかし、ラビィは唇を噛み締めて、嗚咽一つたりとも上げはしない。正体を隠しているも、胸に秘めた王族としての誇りが彼女に不様な振る舞いをさせまいとしているのだ。

(チャンスは必ず来る、その時に……)

言葉を押し殺しながら、脱走の機会を探るサリーの脇で、狼耳兄妹は不満を抱えていた。連行される女囚が、押し黙っているのが面白くないのである。救世主と呼ばれた彼女が、惨めに泣き叫ぶ姿が見たかったのだ。

やがて一行は下町へと通じる、長い下り坂に差しかかる。なだらかな坂道には、所々に何人かの兎耳族の男が横たわっていた。侵略者によって、住居を奪われた者たちだ。

「なんだ、こんな時間に？」

「罪人の引き回しか、ええっ」

鐘の音で目を覚ました兎耳男たちの前を、奇妙な鞍に跨った若き女囚が通り過ぎる。

「かはあつ！ ひつ、ひいっ!!」

下り坂で馬の歩みが速くなると、股への責めが強くなり、こらえきれず徐々に喘ぎ声が漏れ始めた。肌も露なコスチュームと、足を大きく開いた劣情的なポーズとが相俟って、

ギャラリーたちの輝く目が釘づけになる。

「ゴクリ！」と生唾を飲む音が、そこかしこから上がり始めた。

「んんっ、くっ、あうっ……」

坂道の長さはおよそ百五十メートルほどだが、ラビィにはこのまま地獄の底まで続いているかのように、長く果てしなく感じられる。

背中を弓なりに反らし、顎を上げて喘ぐ彼女に、さらなる追い討ちがかけられようとしていた。

「ほらほら、もつといい声で鳴きなさいよっ。この雌兎っ」

ビシッ!!!

「きゃあうっ！」

アリス姫が、ラビィの白い背中めがけて、鞭を放ったのだ。白き柔肌を裂きそうな衝撃が、背中全体に落雷の如くビリビリと走る。

(ぐっ、こ、こんなもの、ぐらいでえっ……)

不意打ちに思わず声を上げたラビィだが、サド姫の執拗な攻撃に弱みを見せまいと、再び唇をギユッと噛んで押し黙った。それでも、鞭打ちは容赦なく続く。空気を切り裂いて襲いくる黒き稲妻が、肩、背中、二の腕、豊満なバストからハミ尻にと身体中に次々と炸裂し、白き肌を赤く染める。

「お、おい……」

「ああ、な、なんかすごいな」

目の前を通り過ぎる女囚の姿に、思わずため息を漏らす兎耳男たち。四肢を剥き出した際どい衣装を纏った若い娘が、奇妙な馬の鞍に足を広げて跨り、身をくねらせながら鞭打たれる姿は見たことのないほど刺激的な光景だ。

路上のギャラリーは、吸い寄せられるようにラビィの後にゾロゾロとついて回り始める。誰もが馬上で練り広げられる女囚の乱舞を堪能したが、艶めかしき舞はその後五分も続きはしなかった。

「はあつ、まったくしぶといわねえ……」

ついに根負けしたアリス姫が、振り回していた黒革の鞭を降ろす。攻撃をやめた敵姫を、勝ち誇ったようにサリー姫は見下ろしてほくそ笑んだ。

だが、それはつかの間の余裕にすぎない。坂の途中に差しかった頃、突如彼女に奇妙な感覚が襲いかかる。

（くっ……な、なんだ……これは……）

押し広げられた乙女のクレヴァスに擦りつけられる紫色の股布。サラサラした内貼りが擦る柔らかく敏感な肉髪は、摩擦で火が付きそうなほどの熱を持ち、下腹部が熱く息づき始めていた。

「くっ、はあっ……」

鋭く立つた兎耳から徐々に力が抜け、根元には炭酸泉にでも漬けられたようにピリピリとした痺れが走り、口元から熱い吐息が漏れる。

耳の痺れは、ハの字に垂れ下がる兆候だ。しかし、垂れ下がることの意味は知っているものの、その時耳にどんな感覚が生じるかまでは彼女は知らない。肌も露な衣装を纏っているとはいえ男性経験はおろか、自分で慰めたことすらない初うぶな王族の乙女にとって、味わったことのない感覚だ。しかし、何か危険なものであることを本能で察知した兎姫は、飲み込まれまいと必死に耐える。

(こ、こんなことぐらいで、参る、ものか……)

こめかみに力を込めて、なんとか痺れを絶とうとする馬上の兎女囚。しかし、一度火のついた感覚は丘の上の青芝を燃やし尽くす如き勢いで燃え広がり、全身を芯まで焼き焦がすように火照らせた。

さらに、女唇の熱さの奥からジワジワと湧き立つむず痒さが邪魔をして、思うように顔に力が入らない。

(んっ、な、何で……こんな時に)

度重なる股間への責めが、捕われの姫君に尿意をもたらし始めたのだ。秘裂から膀胱までが、叩いた音おんき叉さでくすぐられているかのように痺れ、膝がガクガクと震え出す。



(だ、だめ、こんなところで、お願い、静まって……)

太腿を振り、硬く閉じて放尿を食い止めようとすると、間に挟まった木馬が邪魔をする。それどころか、押しつけられた内布で肉襷を余計に擦ってしまふ。沐浴のあとで、水気を拭う時ですら触れることのない内股の奥を拭う股布は、逆に少しずつ湿り気を帯び始めた。「あら、どうしたの？ そんなにモソモソ動いて」

ラビイの内心を知ってか知らずか、不意にアリス姫が鞭で火照った太腿に、氷のように冷たい小さな手を押しつける。

「ひっ！ ひゃあっ、うっ!!」

またも不意打ちに驚き、反り返って叫ぶサリー姫。一瞬、じんわりとした感覚が股間に広がり漏らしそうになったが、下腹部に氣力を込めて、かろうじて防ぎきった。

焦る鞍上の女囚の腿を摩りながら、小柄なサド姫は意味ありげにほくそ笑んだ。

下町に入ると、路上の男たちの数がさらに増えてくる。角を曲がるごとに一人、また一人と増えていく兎耳の追跡者たちは、やがて五十人をゆうに超える大所帯となっていた。背後だけでなく、中には我慢しきれずに横や前に回り込んで、馬上で揺れる女囚の肉体に、熱視線を絡めてくる者さえ出てき始める。鞭打ちがなくなるとも、馬の歩みだけで揺れるたわわな双乳や、網タイツに覆われた白い足だけでも、彼らにとっては十分に魅惑的な

だ。

(なんなの、この人たちは……)

男たちの妙な行動に、馬上の兎姫の心に動揺が広がっていく。異様にギラついた彼らの瞳は、まるで獲物をつけ狙う飢えた狼のようだ。周りに本物の狼がいなかったら、襲いかかってきそうな勢いすら感じられる。

そして、何より彼女を不安がらせるのが、彼ら雄兎たちの耳だ。皆一様に、ハの字に垂れ下がっているのである。

「まあラビイったらモテモテね、なんだか妬けちゃうわ」

アリスが皮肉っぽい口調で話しかけてくるが、馬上の兎姫は毅然とした表情で顔を背け、狼姫の口激くちげきにまるで取り合わない。

しかし、内心では同族の男たちへの嫌悪感が広がり始める。誰もがクーヤのように純真とは思わないが、人前で平然と耳を末広がりに行えるなどとは思ってもよらなかったのだ。

だが本来の彼らは、決して町中で下半身を晒すのと同様な行為ができるようなハレンチな者ではない。こらえきれない理由があるのだ。

彼ら兎耳族に対する満月の影響なのである。

狼耳の民と違い、彼ら兎耳の男には、性欲が異様なまでに高まるという形で現れるのだ。女にも、ヒステリックになるという違う形での影響力があるのだが、何かきつかけがなけ

れば、男ほど強く表に出ることはほとんどない。

皮肉なことに、兎耳の姫が知らぬ雄兎の生理現象を、狼耳の姫はよく知っていたのだ。

「ファンのみんなにサービスしなくちゃいけないわね、ラビィ」

八重歯を見せてニヤリと笑うアリスは、馬上の女囚をどう辱めてやろうかと思案をめぐらす。そこへ兄が、助け舟を出した。

「少し、時間がかかりすぎたな」

西に傾き始めた月を仰いで、ボルガが呟く。彼の言葉に、狼姫がピンときた。

「お兄ちゃまあ、だつたら近道しましょう」

そう言つてアリスが指差したのは、二百段以上はある急な上り階段だ。今度は天国まで昇りそうな階段の出現に、仮面の下で目元がヒクヒクと痙攣する。平坦な道ですら尾てい骨を碎きそうな衝撃が来るといふのに、階段など上られたらどうなるか想像もつかない。

「ま、まで……」

鞍上の女囚が制止するのを無視して、小男が馬を階段方向へ誘導する。元来、馬は段差を嫌うものだが、軍用に訓練されたこれは、いかなる場所でも意に介さず進んでいく。

「あつ！ くうつ、あつあつつ、あぁーっ!!」

一步一步、石造りの階段を上っていく馬は、歩みは平地や下り坂より遅いものの、段差のせいで上下への振動がはるかに大きくなる。一步踏み出すごとに、まるでそのまま空へ

打ち上げられそうなほどの衝撃が、股の下から突き上げてきた。

彼女を苦しめるのは、衝撃の大きさだけではない。階段は坂道よりも角度がきついため、当然尻下がりになる馬の背に乗った木馬も、斜めに傾くことになる。そのため、ある程度衝撃が分散していた真下からの突き上げと違って、股間を前側から集中的に責められるのだ。

ヴィーナスの丘に、きれいに通った一筋の縦割れ。その全体に食い込む鋭く尖った巨大な木製の凶器は、薄布越しにクレヴァスの奥に咲く桃色の肉花を押し広げ、少しずつ散らしていく。

さらに、全身から染み出した脂汗が太腿や股間をしとどに濡らし、後ろへ向けて身体がツルツルと滑り始める。もし、この急斜面で両足を結んだ縄が解ければ、たちどころに階段の下まで転げ落ちてしまう。

「ひっ、ひいっ！ あああつ……ああつ……」

太腿できつく木馬を挟み、滑り落ちるのを防ぐラビィ。力を込めた分だけ、秘裂により深く食い込み、突き上げる衝撃は極限まで上がる。全身とともに声を震わせて喘ぐ彼女に異変が起き始めた。

「おうっ、ふぐっ、お、お腹が……」

下腹部に、少しずつ張りが出てきます。度重なる股間への責めの影響で、尿が溜まり始



めた膀胱が水風船の如く膨らみ始めたのだ。

(ぐっ、こ、こんな時に、また……)

こらえていた尿意のぶり返しに焦る馬上の女囚。おまけに白く肉感的な女体が、段差に合わせて跳ね上がるたびに尻布がずり上がって、双曲の谷間へグイグイと食い込んできた。鞭の直撃を免れて、まだ白さを残した尻肉が少しずつ顔を覗かせ始める。

「うーむ、いいケツしてるなあ……」

「や、柔らかかそう、さ、触ってみたい……」

馬上で跳ねながら引かれていく雌兔の尻に、蟻の行列のように追いかける雄兔たちの視線が吸い寄せられる。まるで柔らかな臀部はおろか、紫布に隠された溝やさらに奥の菊花にまで太い槍が貫くような痛みを、彼女は感じ取っていた。

(そ、そんな、そんなところ見て、喜ぶなんて……)

思いもよらない追跡者の言葉を捉えた兎耳に、痺れに混じって針で突かれたような痛みが走り出す。「恥ずかしい」という、負の感情が現れ始めたのだ。いつも戦っている時は気にならないラビイの服装だが、これほど多くの男たちに繁々と見つめられたことは今までになかった。

紅潮する頬に汗が滲み、全身が鳥肌立つ。

(だ、だめ、意識しちゃ……)

固く瞳を閉じ、こめかみに力を入れて痛みを振り払おうとする仮面の女剣士。

しかし、一度掻き立てられた羞恥心は、無理に消そうとすればするほど、余計に心の中で燃え広がり、全身を焼き焦がしていく。

痛みと痺れ、二つの感覚を頭上に載せたまま彼女の旅はなおも続いた。

雄兎の群れを引き連れたまま、一行は昼間なら大勢の人が行き交う大通りに差しかかる。ここから終着点の中央広場までは、直線距離で三百メートルほどだ。

(き、きたか……見ていろ……)

ここにきてようやく彼女は、脱走の糸口を見つけた。処刑場に着いたら階段を上らせるために、両足の縄を解くはずである。両足さえ自由になれば、逃げ出すことは造作もない。一步一步、処刑場に近づく馬の上で、サリー姫は脱出のチャンスを、固唾を飲んで待つ。大通りに面した家々に人影はなく、住人たちはすでに広場へ集められていた。微かな哀れみの声とともに、自分に視線が向けられているのが、月明かりの下でもよくわかる。

さらに付近一帯に、暴動を抑えるべく送られた狼耳兵たちが、武器を手にして配置に付いていた。

「もうすぐ到着だぜ、お嬢ちゃん」

右手で手綱を引くベンが、左手でラビイの張りのある太腿を摩りながら、ニヤケ顔で話

しかけてきた。優位な立場にある時だけは態度が大きい彼は、反撃できない彼女を弄び、柔らかな女体の質感を堪能しようとする。

その時だ！

チチチッ!!!

彼の足元を、小さな黒い影が素早く走り抜ける。ただの鼠だ。

「どうわああっ!!」

大声を上げて不様に尻餅をつく小心者の狼耳兵は、倒れた拍子に手綱を離してしまった。

ブヒヒヒイイイインッ!

従順だった馬は、突然の絶叫に驚くとけたたましい嘶きとともに荒馬と化して、中央広場に向かって疾風のように一目散に駆け出す。ここに来て罪人の連行は、地獄のロデオシヨーと化した。冷たい空気に包まれた夜道に、石畳を蹴るガツガツという蹄鉄の音と、しつとりと艶を帯びた兎耳娘の喘ぎ声が響き渡る。

「ひいっ! ぐっ、あつ、つ、あうあんっ……」

坂道や階段などとは比べものにならないほど激しい股間への衝撃が、紫の女騎士を襲う。豊満なバストが、ブルンブルンと大きく上下に波打ち、裏地で擦られた桜色の乳首が、表にくつきり形を映すほど固く起立してきた。

「あうっ、あつあつ、ああーっ!!!」





ついに最後の肉門が抉じ開けられた。

断末魔にも似た絶叫とともに大粒の涙が一筋、仮面の下から頬を伝って流れ落ちる。

本来なら、共に王家を継ぐ者を愛し、捧げるはずだった操みさおを侵略者の暴君に奪われた苦痛と悲しみに、兎耳姫の心は崩壊寸前だった。

目的を達すると、再び巨漢の大きな手の平は胸に移り、母乳を搾り出すかのような動きで根元から先端へ向けて何度も揉み扱く。

「ぐうっ……」

火が点いたように熱い乳房に、生暖かいゼリーでも押しつけられたような奇妙な感覚が広がり、両胸を覆いつくしていく。

釣鐘形に変形し、極限まで引っ張られたところで五指が離れると、弾力でプルンプルンと揺れながら、元の丸い形を取り戻す。

まるで子供が粘土を握って楽しむかのように、両手で双乳を揉み扱きながら、腰を激しく上下に突き動かす髭面の暴君。目尻を下げ、だらしない笑みを浮かべつつ、己が下半身の上で跳ねる女体全身の感触を楽しんでいる。

「ふふっ、こんなのはどうだ」

ボルガの腰の動きが変わった。すべての肉門を突き破るまでは激しい突き上げだけだった腰に、緩急をつけた円を描くような動きが加わる。

「ふあうっ！ な、なに、なにこれえーっ!!」

「いいぞ、燃えるがよい」

突然変貌した暴君の責めに戸惑い、わけもわからず吐息交じりの叫びを上げるラビィに、ますます興奮する髑面の狼耳王子。

揉みくちやにされる豊乳に、下腹部の上で跳ねる柔らかなヒップと固い尾てい骨。そして、固くいきり立つ肉棒を飲み込み、グチュグチュと淫音を奏でながら、締めつけ擦る熱を帯びた肉壁。

「はうっ、あつ、あああつ！」

唇を這わせる白いうなじや、突き上げるごとに上下に跳ねる、束ねられた長い金髪の香り。うっすらと紅潮した頬に、柔肌にジットリと浮かぶ汗。小刻みに身を震わせながら徐々に荒くなる息遣い……。

中でも、彼を最も興奮させたのが、頭頂で揺れる兎耳の動きであった。

一度は気合で立てた耳が再びピクピクと痙攣し、頭を垂れそうになるのを必死で抑える様が、狼王子の劣情を激しく掻き立てる。

（あ、また……）

しなやかな兎耳が大きく揺れるとともに、あの根元がピリピリと痺れる感覚がよみがえる。

さすがに二度目ともなると、性に初な兎姫にも、この感覚が耳をハの字に垂らす前兆だとわかつてくる。

肉の凶器が膣内を擦り、先端が子宮を突き回すたびに起きる、下腹部を内側から撫で回されるような感覚と連動して起きる耳の痺れ。愛する兎耳の尻を苦しめ、さらに己が肉体をも汚す男の暴挙に、身体が勝手に反応してしまっているのだ。

「こんなこと、こんなことあるはずか……ない……あるものかあーっ!!!」

強がりながらも、一方的に押しつけられる快楽が、炎となつて心のすべてを焼き尽くしそうになるのを感じるラビィ。忌むべき醜肉に女唇を擦られるたびに、焼け石を押しつけられたような熱さが股間から全身へ駆け巡るとともに、とめどなく粘液を溢れさせる。

まるで、狼耳の略奪者のピストン運動をより激しくしようと、みずから催促しているかのように……。

「きっ！ くっ、ぐあうううっ!!」

痺れを断ち切るため、奇声を発しながらこめかみに力を入れようとすが、不安定な姿勢と感情故に、力の調節がうまくいかない。つい全身に力が入ってしまい、身が固くなる。と、肉人參で広げられた女裂もギュッと固く締まる。

「うおあっ、す、すごい、こっ、これはあああああーっ!!!」

突然の締めつけに驚くとともに、歡喜の叫びを上げるボルガ王子。己が一物を、きつく

挟む高熱を帯びた肉壁が、彼にはより一層肉棒の愛撫を求めてしがみついてきているように思えたのだ。

「ふんっ！ ふんっ、ふんんんーっ!!」

ありもしない願いに応じるかのように、豪腕で支えた肉体をさらに激しく上下に揺さぶる狼耳の巨漢。カチカチに固まり、今にも爆発しそうな肉砲が、柔らかな膣肉を掻き回す。

「はあっ！ はあっ！ そっ、そんなに、ゆら、揺らされたら……んあうっ!!」

声を震わせながら喘ぐラビィに、続けざまに危険が迫る。激しい振動のせいで、アイマスクに入れられた切り込みが、眉間の半分にまで来てしまったのだ。

「ぐっ……」

咄嗟に力を緩める兎姫の耳に、いきなり鼓膜を破りそうなほどの大声が飛び込んできた。

「だ、出す、出すぞおっ！ その身にすっかり刻むがいいっ!! 我に支配された証おおおおおっ!!!」

野獣の如き雄叫びを上げたボルガは、ラビィの股間を串刺しにしたまま、グリグリと激しく腰を前後左右にグラインドさせる。

「ま！ まて、そ、それ!! それはあーっ!!!」

ついに訪れる受精の瞬間。兎耳姫は、全身の力を振り絞り、この最悪な状況から逃れるべく、懸命に腰を揺すり、醜悪な肉塊を引き抜こうとする。

だが、皮肉なことにその動きが、ボルガの淫欲を満たす手助けをしてしまう。高熱を放つ、強暴な肉人參に吸いつくように纏わりついた肉褌が、固い陰茎を激しく擦り上げた。

「うっ！ おおっ、おおおおーっ！！」

「だ、だめえええっ！ 止めてええええーっ！！」

ブッ！ ブワシユユエーッツツツツ！！

悲痛な制止も虚しく、兎耳の姫は子宮の奥底に、マグマの如く熱き体液が吐き出されたのを感じ取った。

パウザー王家最後の純潔が、完全に打ち壊され、汚された瞬間だ。

「あうっ！ あっああーっ！！」

細い喉を反らして喘ぐヴァイオレットラビィことサリー！！パウザー姫は、自分の四肢がバラバラになったような錯覚に襲われる。

（私、壊された、の……）

魂だけが肉体から引き剥がされ、白夜の中へ放り出されたように心が白く曇る仮面の劍士。目の前の光景がぐるぐると回り出した彼女に、さらなる地獄を告げる言葉が投げかけられた。

「まだまだこれからだぞ、劍士殿」



ジュルツ……ジュブプツ……。

淫らな音を立てながら、ボルガは巨大な肉人參を引き抜いて床上にあぐらをかくと、膝の上に目を白黒させたままの姫を乗せる。

二度射精してもなお衰えぬ強張りを、なだらかな背中に押しつけながら、悪しき王子は両手で女体を弄り、次の責め方を考えていた。

「ま、まだ何かするつもりか！ これ以上は、何も、何もせん!!」

破瓜の痛みも覚めやらぬ中で、それでも強気に言い放つ兎姫の下半身に、微妙な変化が現れ始める。若く張りのある肉体は回復も早く、巨根によって大きく押し広げられた秘裂は、白濁液を垂らしながら早々と口を閉じていく。

「だーめ、そうはいかないわよ」

女陰の復元を、邪な狼耳姫の手が止めた。閉じかけた肉の花弁に、爪を立ててギュッと摘み上げたのだ。

「うああつ!!!」

敏感な秘肉を抓まれた刺激に、思わず喉を反らして叫ぶサリーに、意味ありげな笑みを浮かべてアリスが話しかける。

「お楽しみはまだまだこれからよ」

彼女は人型の耳から外したバラの花を模ったイヤリングを、兎耳姫の股間につけ始めた。



「あうっ！ な、なにをする、くふっ……」

黄金色に輝くU字形の金具で桃色の肉髷を挟み、ネジをきつく締め、左右に一つずつ取りつけられる小さな造花。血のように暗く赤い輝きを放つ花は、締めつける秘肉の鮮やかなピンクを引き立て、淫靡さを増していく。

だが、これで終わりではない、アリスは続いてイヤリングの金具に一本ずつ、細い金属性の糸を固く結びつけた。

「これでよしっ、さーて……」

両方のバラに結びつけた金属線を、肉髷が左右に広がるようにグイグイと横へ向けて引っ張る黒衣の狼耳少女。

「ひぐっ、こ、こいつめ……」

僅かに動かせる腰を左右に振って、金具を外そうとするラビィ。しかし、桃色の秘肉にぎゅちりと挟まれた金具のネジが緩むことも、金属線の固い結び目が緩むことも決してない。

無論、金属の糸はそう簡単には切れるものではないため、兎耳姫のクレヴァスは容赦なくサディストの姫によって広げられてしまう。

限界まで広げられると、ワイヤーは白いブーツの踵を経由して、頭上に向けて引っ張られる。頭上まで糸が届くと、ピンと弛みなく張られて、怒りに広がる兎耳の先端に引っか

りと縛りつけられた。

「はい、できあがり。さーて、雌兎ちゃんはどうするのかしら？」

秘肉と兎耳の連結が終わると、狼耳姫は細くしなやかな指で、造花のバラをピッと弾く。

「ヒィッ！」

短い悲鳴を上げて思わず仰け反るラビィ。

つい動かしてしまった頭につられて、ワイヤーが引っ張られると、ただでさえ大きく開けられた秘唇がさらに大きく、裂けそうなほど左右に割られる。

「うっ！ うああああっ!!」

アリス姫が、我が身になにを仕掛けたのかが、彼女にもようやくわかった。またしても、過酷な二者択一が突きつけられたのである。

両耳を開いて立てている限り、彼女は自身の兎耳で己が縦割れを広げ、膣内に溜まった精液を垂らしながら蠢く秘肉の奥を晒すことになる。

かといって陰唇を閉じるには、耳をハの字に垂らして、糸を緩ませるしか方法はない。無論、そんな恥ずかしい姿を民の前で晒すことなどできるはずもなかった。

たとえどんなに口で否定しようとも、周りの群集、とりわけ同族の者たちは数々の辱めに快感を覚えていると思うに違いないからだ。

足を閉じようにも、豪腕に膝を押さええられ、限界まで広げられた太腿はビクともしない。

だからといって、項垂れて糸をたるませて少しでも陰唇を閉じようとしても、それさえも適わぬことであつた。

背中と巨漢の分厚い胸板の間にお下げ髪を硬く挟まれて、頭を上下に動かすことができないのだ。

さらに厄介なことに、弾力のある若い肉体は徐々に秘唇を閉じていき、逆に兔耳を倒すように繋がれた金属線を引っ張り始めた。

「ぐぐっ……」

耳を垂らすまいとこめかみに筋を立て、眉間に目いっぱい力を入れるヴァイオレットラビィ。当然、秘裂が閉じるのをみずから兔耳の力で止め、中を人目に晒し続けることになる。

彼女の羞恥心を煽るかのように、開いた肉花の奥底から、白き汚液がゴボツと音を立てて噴き出した。

「あらあら、自分から恥ずかしいところ見せちゃつて。この雌兎さんつたら、見せたがりやさんののね」

冷酷な狼姫は、クスクスと笑いながら呆れたように言い放つと、ラビィの股間に手を伸ばし、中指を立てて膣口に押し込んでいく。

「うっ！ ああっ!!」

サリーに突き刺さった肉人參が引き抜かれた瞬間、仕掛け人の絶頂に同調するかのよう  
に、兎姫の桃色の肉襷を扶むイヤリングがついに外れた。甲高い金属音を響かせながら、  
赤いバラの造花が宙に高く舞いあがると同時に、黒き仮面が最後の悲鳴を上げる。

ピシィィィィーッッッッ!!!

眉間から真つ二つに引き裂かれたマスクがハラリと墮ち、ついに晒された女剣士の素顔。  
現れた美貌に、周りのナベモ聖兎国民が凍りつく。

「なっ、あ、あれは！ サリー姫!」

「サリー様が、ヴァイオレットトラビィ、だと……」

目を爛々と輝かせ、処刑される女囚を見つめていた男たちの末広りの耳が、ゆっくり  
と前合せに閉じ始める。

「じゃ、じゃあ、もう一人はクーヤ様?」

「そ、そんな、そんなの……イヤアーツ!!!」

兎耳の女たちも、憧れの王子様が野獸と化して実姉を犯す姿を目の当たりにして、狂っ  
たように泣き叫ぶ。

「静まれいっ！ 兎耳族の諸君」

混乱する大衆を一喝し、その場を鎮めるボルガ。曝け出していた一物をしまい、雄々し  
く立ち上がった姿は、下半身を晒して喘いでいる姿とはまるで別人のように凛々しい。

彼はラビイの兎耳を掴んで、手元にグイッと引き寄せる。

「あうっ……」

呆けた兎姫の頬に、黒ずんだ太い鼻を押しつけ臭いを嗅ぐと、檀下のギャラリーに向けて高らかに言い放つ。

「ふっ、本物のサリー姫なら、こんな下賤な臭いはせぬよ」

狼耳族の嗅覚、とりわけボルガの鼻の鋭さは兎耳族の者でも知らぬ者はいない。彼のお墨付きが、あつと言う間に兎男たちの心の枷を解き放った。

「……そ、そうか、そうだよなあ」

「サリー様もクーヤ様も、城から出られるはずがないさ」

救世主の正体が、敬愛する姫君でないと知り安堵する兎耳の人々。だが、それは胸の内に抱いていた邪な思いを擁く者が、遠慮なく思いを曝け出せることを意味していた。

「それにしてもサリー姫によく似てるわね。じゃあこの子もクーヤ王子にそっくりなのかしら？」

気絶した兎耳王子に膝枕していたアリスが、不意に言い放つと小さな手でマスクをキュッと握った。少し上へ捲られかけたその時だ！

「やめて、弟に、もう酷いことしないで……」

弟の正体を明かさせまいと、姉が力の限り叫ぶ。町で暴れる狼男を止める時のような力

強さがまるで感じられない、悲痛な叫びだ。

「だーかーらー、坊やを助けたいなら、代わりにアリスを楽しませなさいって言ってるでしょ」

呆れたような口調で言い放つと、黒衣のサド姫は、檀下で目をギラギラさせながら耳をハの字に垂らす男たちに、チラリと目をやる。

今にも己がズボンの股間を引き裂きそうなほど隆起させた兎耳の群集。彼らを見て、妹の企みを理解した兄は、皮肉を込めて雄兎たちを見下ろして言う。

「ほほう、兎耳族のくせに、我に鹵向かう兎剣士が許せぬか、よい心がけだ」  
「当然です、ボルガ様」

「俺たち、ボルガ様に弓引く不届き者を、成敗したいんでさあ」

狼王子の言葉に「待ってました」とばかりに嬉々として処刑執行人に立候補する男たちは、己の肉欲を満たすため、次々と狼の下僕に成り下がる姿は、満月の仕業とかたづけするにはあまりに浅ましく、そして悲しい光景だ。

刑の執行は、狼耳の支配者から兎耳の下僕たちへと委ねられていく。

「あつ、はああつ……」

最後の枷だった耳の金属線を解かれたサリー姫は、震える足でよろよろと立ち上がる。

しかし、身体は自由の身でも、弟の素顔を隠したいという見えない枷に、心は縛られたままだ。

処刑台の正面に立つ彼女の背後から、サド姫の怒鳴り声が響いてきた。

「ちゃんとさつき教えた通りに言うのよ！ わかったわね」

背後に、楽しげな狼姫の視線を感じながら、兎姫は彼女に教え込まれた儀式を執り行う。兎耳をハの字に垂らし、足をおおずおおと大きく開き、さらに両手で己が秘裂を内臓まで見えてしまいそうなほど大きく広げた。

ゴポオッ!!!

奥の泉から、実弟に注がれたばかりの子種を噴き出す淫靡な音に、兎男の耳が反応し、一斉に厭らしい熱視線を彼女の股間に浴びせる。

「わ、私は、ボルガ様に逆らった、重罪人です。お詫びに、この身体を捧げます。お、お尻の穴も、こ、ここの割れ目もすべて使って、どうか、私を……処刑してください……」

視線を浴びながら、懺悔の言葉を発する兎姫の全身が、小刻みに震える。項垂れて、搾り出すような細かい声で口にした言葉は、狼耳男が兎耳女を性奴にする際強要する宣言を、狼姫がアレンジしたものだ。

さらに彼女は、あられもない姿を片時も見逃さんとまばたき一つしない観客たちの前で陰核を摘み出し、親指の腹で捏ね回す。

「ど、どうか……処刑を……」

膝をガクガクと震わせながら、男たちを誘うようにみずから蜜を溢れさせていく兎耳の  
叛逆者。

剥き出しの四肢にふくよかな胸、女体のすべてが、淫欲に満ちた視線に晒され恥辱に赤  
く染まる頃、壇下からギャラリーの声が響く。

「よし、処刑だ処刑だ、みんなで処刑だぁーっ!!」

「おぉーっ!!!」

懺悔の言葉を聞いて、狂ったように雄叫びを上げる飢えた雄兎たち。足元から地鳴りの  
ように響いてくる歓声に、そっと目を伏せる兎姫の頬を、一粒の涙が伝っていく。

弟を救うため、みずから性奴へと堕ちていく哀愁の姫剣士ヴァイオレットラビィことサ  
リーバウザー姫。彼女めがけて、我先にと壇上に飛び上がる処刑執行人たちは、呆然と  
立ち尽くす兎女囚の肉体を押さえ、紫のスーツを引き裂いていった。

「うーんっ、あうっ、ああああんっつつつ!!」

一人、また一人と、救世主だった雌兎を処刑していく雄兎たち。前屈みで木柱に抱きつ  
く彼女が突き出す尻にしがみつき、開いた縦割れや菊座を、いきり立つ肉人參で代わる代  
わる刺し貫いていく。



頭上で揺れる兎耳は末広がり垂れ下がり、もはや立ち上がるだけの力はない。

いや、立ち上げる必要すらないのだ。

「おいおい、随分とへろへろじゃねえか。ホントに処刑しちまったらシャレにならんぞ」  
スキンヘッドの黒耳男が、女囚の秘裂を犯しながら不服そうに呟く。兎耳族に刑の執行が委ねられてから、彼女はすでに十人も執行人たちに犯され続けてきたのだ。

背後に一列で並び、順番を待つ雄兎の行列は処刑台の周りに幾重もの輪を作り、途切れる暇すらない。

「も、もう、らめえ……」

ついに力尽き、木柱を爪でガリガリと削りながら滑り落ちるサリー姫。銜え込まされていた肉人參がズルリと抜けると、中からゴボツと音を立てて白濁液が滝のように溢れ出した。

「はうっ、はうっ、はうっ、んんっ!!」

床に突っ伏した女囚は、右手の親指をしゃぶりつつ兎耳を揺らしながら肩で息を切る。

(い、いつまで続くのお……)

延々と続く陵辱刑に、疲弊しながらも心の火照りを抑えられない雌兎。だが同時に、何か言い知れない物足りなさを感じている。

まるで、いつまでたっても前菜ばかりで、メインディッシュが出てこないコース料理を

食べさせられているような中途半端な満足感を、兎男たちからの陵辱の中に見出してしま  
うのだ。

戸惑う彼女の背後に、刑を中断された執行官の魔手が迫ってきた。

「おら雌兎！ 呆けてる暇はねえぜ」

まだ達していない禿男がサリーを仰向けに転がし、呆然と天を仰ぐサリーの頬を叩いて  
気を取り戻させる。

「あ……」

あられもない自分の姿に気付き、慌てて股を閉じ、両手で胸を覆い隠そうとするが膝を  
黒兎に、両手を次に控えた茶耳兎に取られた。

「まだ俺のは、終わってないんだからな」

足を大きく開かせた黒耳兎は、耳と同じぐらい黒ずんだ股間の肉人參の先端をサリーの  
股間へあてがいがい、遠慮なく腰を突き込んでいく。

「ひゅわわうっ！ ま、また、ふっ、ひいいいっ！ ひいいいーっ!!!」

背中を床に擦りつけ、全身を揺らしながら声を震わせて喘ぐ姫兎。無遠慮に突き込まれ  
る肉の人參が、消えかけの焚き火のように中途半端に燻ぶるサリーの情欲を、再び燃え上  
がらせる。

「こ、これもすごいけど、すごいけど……ひきやうっ！」

黒兎の激しい突きに合わせて上下に波打つ巨乳を見て、茶耳兎が動き出す。

「もう待ってられんっ！俺はここを処刑してやるうっっ!!」

受刑者の細い手を離して、彼女の胸元に馬乗りになると、胸の谷間にいきり立つ一物を挟み込む。そのまま柔らかな双乳を握り、左右からギュッと押しつけて揉み抜く。

「はうっ！あつかはあつ!! はあつ、ああつ!! む、胸があ……胸があああつ!!!」

いきなり巨乳を押しさえつけられ、息苦しきのあまり、大きく口を開けて喘ぐサリー姫。艶かしく開いた唇と荒い息遣いに、興奮した次の処刑執行人が乱入してきた。

「それじゃあ、ワシヤこつちをやってやろうかいのお」

現れたのは、齢八十近いと思われる白髪の老人だ。老いた肉体には不釣り合いなほど太く長い肉の人参を、容赦なく桜の花弁のような唇に押し込んでいく。

「うぐあうっ！ひ、ひゅ、ひゅさあいつつ!!! ひいやややーっ!」

年季の入った陰茎は、これまで啜えさせられてきたどの肉棒よりもはるかに生臭く、不気味なほどの皺を寄せている。

「いやっ、きひいやあんっ!!」

首を左右に振って、必死に振り払おうとするサリー姫。しかし、老執行官は些細な抵抗も許さない。

「こら、弟がどうなってもいいのかい？」

狼の威を借りて、己が欲望を満たさんとする老兎ろうと。クーヤの事を出されては、もはや抵抗することはできない。

「んあつ、んっんっ、くんっつっ！」

老人に言われるがままに、口での奉仕、否、処刑を受け入れる女囚。二人のやり取りを見ていた黒耳と茶耳も、再び動き出す。

「それそれそれ、自分でも腰を振らねえかつ！」

「と、どうだあつ!!! 弟のより、太くて硬いだろおっ！」

グチュグチュと淫音を奏でながら、女壺の中を縦横無尽に掻き回す肉棒。柔らかな乳房に吸いつくように挟まり、前後に激しくスライドする男根。そして、先割れから染み出た涎を、ぷにぷにと波打つ頬内に塗りつけながら暴れ回る年季の入った巨根に弄ばれる姫兎。

「んはっ! むふああつ、こ、こんなに、こんなにいつ！」

荒ぶる肉棒に弄ばれ、喘ぐラビィ。だが、彼女に襲いかかる凶暴な肉人參は三本では済まなかつた。

「まだお留守なところがあるじゃねえか」

「そうそう、時間があったいねえし、やっちまえっ!!!」

顔に傷のある筋肉質な巨漢と、色白で耳の細い小男が割り込んでくると、白魚のような細い指に、己が一物を無理矢理握らせた。

「はっ、はあっ、はいっ」

すぐさま両手に挿んだ肉棒を擦り始める横たわりし性奴姫。親指で開いた笠の下を擦りつつ、残る四指をピアノの早弾きのように器用に動かして、燃えるような男根を揉み扱っていく。

「こ、こんなに、一度に……ひいっ！」

同時に五本も突き立てられた肉人參を、無我夢中で処理していく仰向けに横たわりし女囚。唾えた唇が、握った手の平が、そして挟み込んだ胸と股の谷間が、地震のような脈動をはっきりと感じ取る。

彼らの処刑が完了する時が来た。

「あ、く、来る、来る、来るの、来るのねえっ!!」

「わ、わかつてるじゃねえかあつ！　イクぜえーっ!!!」

バジュッ!!!　ジュブッジュブーッ!。

真っ先に炸裂したのは黒耳の雄兎だ。

「ひっ！　で、出てる、中にいっぱい、いっぱいいいいいーっ!!!」

大きく開いた両足を、こむら返りがおきそうなほどピンと張り、痙攣するサリー。

「あっ、熱いのっ、いいっ!!　でもお……」

子宮の中で、火薬のように炸裂した男の精を感じ取る彼女に、続けて握らせていた二人

が、同時に果てた。

「ぐっ、もう、だめだあつ!!」

「うおおおおーっ!」

パシユツッ! ドパパパッ!

ドクンッ! ドクッドクッドクッ!!!

大きく広げた手の先で扱かれながらも、飛び出した熱きザーメンは、茶耳男が掴んだ胸まで飛散する。

「あはっ、あ、熱いのが、熱いのがまた来たあんっ!! けど……これじゃ、なあうんっ!」  
強引なマッサージで火照った豊乳を、さらに熱する汚液に焦らされる雌兎。胸元から上がってくる熱気と男の生臭さに、頬を紅潮させて悶絶するサリィ。

「おっ、俺も、だあーっっっ!!!」

ビュルーツ! ビユツビユツ!! ビユツツツツ!!!

彼らに呼応するかのように、双乳処刑官も挟まれた巨乳の谷間で、限界に達した。

「かびはひゃあっ! の、喉が!!」

膨れ上がった深紅の亀頭から噴出した熱汁が、ほっそりとした喉元を直撃した驚きに、大きく震えた舌が、口内で蠢く軟体にとどめをさす。

「おほっ、ほっほおおおーっ!」



先に果てた執行人たちに「若いのにだらしない」と言わんばかりの怪訝な視線を送っていた老人も、堪えきれずに射精してしまった。

「うぐ、うああああっ!! ごぼっごぼっ……ち、違う、これ違うっ!!!」

口の中に出された途端、それまでおとなしく頬張っていた肉棒を狂ったように振り払い、頬に溜まった精液を一滴残らず吐き出す。

「なんじゃ? わしのモノに不満でもあるのかあっ! この雌兎が」

彼女のうわ言を、己が一物への不満と捉えた老兎が、金切り声を上げながら硬く勃起した乳首をキュッと捻る。

「ヒィッ!! 違う、違うの、クーヤ、クーヤの、がいいのおっ、クーヤのじゃなきゃだめなのおっ!」

いつの間にか壇上から消えた愛しい弟を求め、ついにその名を絶叫する兎耳姫。執行人たちの処刑に快感を覚えつつも、心のどこかに引っかかっていた物足りなさが、堪えきれずに爆発したのだ。

「クーヤ王子がどうしたってえ?」

「おおかた、あの弟を愛しの王子様代わりに夜な夜な……ってところだろうよ」

「なるほど、どうりで嫌々言ってる割には気合が入ってたってワケだ。イケナイお姫様だ  
んつ」



この続きは製品版をご購入の上、  
お楽しみください。

編集・発行

**株式会社キルタイムコミュニケーション**

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

**<http://ktcom.jp/>**

# キルタイムコミュニケーション小説シリーズ あなたはどのタイプ？



ドキドキラブな  
ハーレム系ライトノベル！



二次元  
ドリーム文庫

サイズ:文庫

戦うヒロインが屈服されちゃう！  
かなり過激なライトノベル！



二次元  
ドリームノベルズ

サイズ:新書

※「二次元ドリームノベルズ」は18歳未満の方は購入できません

日常に密着したエロス、リアルな  
舞台設定で送る官能小説レーベル！



リアルドリーム文庫

サイズ:文庫

フリーダム度120%!?  
ジャンルにとられないドキドキ★ラノベ！



あとみっく文庫

サイズ:文庫

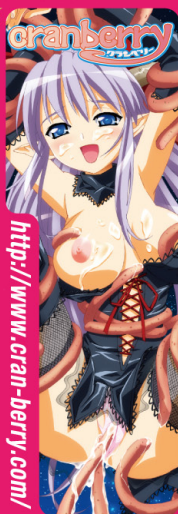
詳しくはKTCの公式サイトにて！ <http://ktcom.jp/> 検索

Click

電子書籍版も各ダウンロードサイトにて続々配信中!!



KTCの戦うヒロインオンリー漫画雑誌! 18禁ではないからこそ表現できるドキドキがある!!



二次元ドリームノベルズがアニメにも進出! 新生ブランド・cranberryをよろしく!!



二次元ドリームノベルズから生まれた美少女ゲーム! 「ミルフィーユ」ブランドにて続々登場!



二次元ドリームノベルズが携帯電話で読める! 携帯サイト限定の書き下ろし小説もあるよ!